



[エマオ通信]

No.10 (2025 年 5 月 15 日発行)

発行人 高良 研一 (会長)

編集人 稲川 仁 (事務局長)

発行者 木村 均 (書記)

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 「伝道者養成と教会形成を担う働き」

25/26 年度主題: 「私と教会が元気になるには」

聖句: わたしたちの心は燃えていたではないか (ルカ 24:32)

<メッセージ> 「今、共にキリストを証しするために」～機構改革がめざす協力伝道の姿～
宣教室長 坂元 幸子 (中野教会協力牧師)

日本バプテスト連盟は今回の機構改革の主題に「今、共にキリストを証しするために～新たな『自立と協力』」を、その副題に「各個教会と地域が主体となる協力伝道」を掲げています。この改革は連盟事務局においては22年度以前の「2部・9室体制」が23年度から新たな「3室」(常務理事室・宣教室・総務室)に再編成されたことを意味します。かつての「宣教部」の「国内伝道・国外伝道・教会教育・青少年伝道・教会音楽」の5室の働きは、その多くが地域協働委員会と研修委員会、また国外伝道臨時委員会に引き継がれました。その結果現在の「宣教室」は「国内伝道・国外伝道・発行物(『聖書教育』と『新生讃美歌』)」の3部門を主として取り扱い、連盟中長期第1期中(23～26年度)には国内も国外もさらに新たな制度へと移行してゆく途上にあります。私は宣教室長として3年目です。

コロナ危機以降、全国の諸教会・伝道所の状況は一層厳しくなりました。実際、過去17年間で解散・閉鎖に至った群れの数は、わずかながら新規開設を上回りました。「教会のサバイバル」は全教派の急務です。そのような中、「各个教会・地域が主体となる協力伝道」の姿を私たちはどのように描けばよいのでしょうか。

ひとつの大切にしたいイメージは、これまでの「『教会成長』とは数値的拡大・財政的自立」というだけの理解から私たちが解放され、「それぞれの群れがそれぞれの『教会の物語』を喜びをもって証しし、互いに孤立せず、孤立させず、キリストにおいてつながり合って協働してゆく協力伝道」の姿です。「共に多様な声を響かせ合う協力伝道」と言ってもよいでしょう。それは聖書が指し示す「もはやユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(ガラテヤ3:28)により近づいてゆく歩みではないのでしょうか。

私たちは皆、変化を恐れます。警戒し拒みます。そしてなんとか現状を守り、慣れ親しんだものにしがみつこうとします。そんな私たちにイエスさまはそっと伴い、ご自身の身に起こったこと一十字架と復活一を通して私たちを新たな世界へと導かれます。多様な者たちが共にキリストを証しする、その喜びに向かって一歩踏み出すようにと招きつつ。



東京バプテスト神学校本科生の永田乃愛さん、専攻科生の鬼澤寛神学生、坂元俊郎牧師(写真左)と共に

<証①> 「私とキリスト教の出会い、そして今」 中国・四国地方連合会長 石倉 央 (広島教会)

昨年65歳になりました。介護保険料の高さに高齢者としてカウントされる年齢になったことを実感しています。信仰生活は18歳の若者です。成年年齢の引き下げにより大人の仲間入りをした年齢と言ったところでしょうか。

山陰・松江の出身でキリスト教とは全く縁がない世界で育ちました。広島での学生時代、当時のローマ教皇ヨハネパウロ二世が「過去をふり返ることは将来に対する責任を担うことです。」と、4回繰り返し発信された広島平和アピールを平和公園に出向いて生で耳にしたことが数少ないキリスト教との出会いでした。

卒業後、保険会社に勤務、松山・札幌・米子・千葉・山口・帯広と全国を転勤しながら最終勤務地となる広島に戻ってきました。今思えばどの地にも通うことができる距離にバプテスト教会があったのですがキリスト教との繋がりはまだ起こされていませんでした。

広島に戻り3年目、米国に住む親族の家に滞在する機会が与えられました。滞在先がクリスチャンファミリーであり、何か感じ思うところがあったのか、帰国後、私たちは広島教会へと導かれました。1年後の2006年9月に当時の高橋秀二郎牧師からバプテスマを受け、半年後に息子もバプテスマを受け、私たちは一気にクリスチャンファミリーへと造り変えられました。

40代後半で信仰生活に入りましたが、信仰を持つということは頼りにする土台があり立ち帰る先があるということだと思います。心が折れたり挫折したりすることもあります、不思議な出来事や出会いなども起こされ、今は消費者問題をライフワークとして消費生活センターで働いています。

2014年には広島での全国壮年大会の実行委員長として全国の皆さんに大変お世話になりました。そのような信徒が今年度から中国四国連合の連合会長の働きを担うことになりました。今、連盟も連合も教会も人的に財政的に様々な課題を抱えていますが、このような時だからこそ私たちの活動には「楽しさ」や「喜び」が必要と考え、連合活動のテーマ(主題)には「みんな・仲良く・楽しく・そして喜んで」と掲げました。どうぞお祈り下さい。



<証②> 「仕える者として」

山本 淳之（富野教会）

私は岡山県の出身で、神主との関係が深い神道の家庭に生まれ育ちました。そんな私がなぜクリスチャンになったのかを簡潔に述べます。高校2年の時、家庭内で、ある問題が起き、クリスチャンでもなかった父が解決の道を求めて訪ねた先が神社ではなく教会でした。父がミッション高校の卒業生であった、ただそれだけの接点でしたが、私まで無理やり教会に連れて行かれ、いわば巻き添えをくらったわけです。初めて開く聖書と牧師の説教が私と一体何の関係があるのか全くわかりませんでした。ただ、心身共に疲れていた私は、唯一「私のもとに來なさい。休ませてあげよう。」というみ言葉にだけは安らぎを感じ、以降も半ば惰性的に教会に通っていました。そんなある時、牧師から受洗を勧められ、よくはわからないが悪い事ではないと思い「はい」と答え受洗しました。しかし、問題はその後です。大学生として九州に住み、別の教会へ通い始めたのですが、真の悔い改めができていなかった私は心の矛盾に苦しみ、受洗したことを後悔するようになりました。離れたと思ったまさにその時、奇しくも教会の特別伝道集会の「招き」に与かったことで、諸々の罪を含め何より神様から離れることこそが大きな罪であると聖霊から示されました。こんな汚れた私でもイエス様は赦し贖ってくださったのだと改めて知り、悔い改め、立ち返ることができました。更にその後、私の両親も受洗の恵みに与かることとなったのです。このように、順番が全く成ってない私のヒストリーでしたが、それは私ゆえに取られた主の手段であったのだと思えないのです。願ったとおりではなく、思ってもみななかったことをいつもなさる主の深い計らいには感謝の他ありません。



主は豊かであったのに貧しくなられた。それは私たちが豊かになるためであると聖書は云います。今思えば、私を豊かにするためにイエス様ご自身がとりなし、仕えてくださったのです。

今、私はキリスト教学校の事務職員としてキリスト教教育の推進に従事しています。入学してくる学生・生徒たちの殆どがキリスト教に触れた経験がなく、初めて聖書を手にするのですが、礼拝でのメッセージをまっすぐに受け止め、共感と感謝の心を持ち、前を向いてゆく学生・生徒たちの姿を見ていますと、私自身大いに励まされ、無から有すなわち命を生み出される主の知恵と力を崇めずにはいられません。

また、教会においても、執事を仰せつかっておりますが、他教派から移ってきた私にとって、この「執事」という呼び方は響きがよく、好きになりました。「あくまでも教会に仕える職務であって、支配者ではない。」と教会員手帳にも明記されており、聴くだけで主の僕としての姿勢が正されるような呼称です。これからも、主の赦しに感謝し、仕えていきたいと思います。

「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。」ローマの信徒への手紙 1 1 章 3 3 節

<今後の歩みと働きのための祈り>

◎ 2025 年 8 月 22 日(金)～23 日(土) 第 60 回全国壮年大会 in さいたま(埼玉の浦和教会でオンライン併用)

○北関東連合壮年会実行委員長：戸田 浩司(西川口教会)

○テーマ これからの No Border な教会の話をしよう！ ～教会が「教会」であり続けるために～

○主題講演 講師：朴 思郁(日本バプテスト連盟宣教研究所所長、西川口教会牧師)

○多くの参加者(オンラインを含む)にとって良き学びの大会となるよう、準備にあたっている実行委員会のために祈りましょう。

◎ 今年度、西南学院大学神学部神学科への入学者は 1 名で、リカレント生を含め、合計 7 名、東京バプテスト神学校専攻科入学者ゼロで専攻科生は合計 4 名、九州バプテスト神学校専攻科へ 6 名入学し、専攻科生は合計 8 名となり、全般的に神学生が少ない状況です。

是非とも、これらの神学校で学ぶ献身した神学生が起こされるように教会・伝道所を上げて切にお祈り願います。

◎ 教会形成を担う働きとしての協力伝道の一環として：

○常盤台教会の五島教会での協力伝道の働き

○福岡連合の姪浜教会壮年会の壱岐教会での修養会

○西九州連合の五島教会への協力伝道

○北海道連合の 3 教会合同 WEB 礼拝

○中部連合壮年会の福井教会への協力伝道

のように、各教会での協力伝道の取組みや各地方連合やその壮年会を通じて、協力伝道派遣チーム(伝道隊)による、協力伝道の業により、一人ひとりが元気になる、教会が元気になることができるように。

◎ 特色と強みを生かした三つの神学校(西南大、東京バプ、九州バプ)と宣教研究所との相互連携により、諸教会・伝道所の各教会員の学びが豊かに祝されますように。

◎ 信徒一人ひとりが伝道者、そして献身者となり、教会の働きを担う主体となるために：

○神学校での(オンライン)受講等により、良き学びの機会が与えられるように。

○信徒説教のための学びを深め、無牧師の教会・伝道所等での奉仕ができますように。

○信徒一人ひとりの献身から「教役者の働きを担う献身」へ導かれるように。

◎ この 4 月からの 2025 年度より神学校献金が、神学生奨学金だけでなく、東京バプ、九州バプの両神学校への運営資金支援(年間 350 万円)として用いられるので、神学校献金の目標(総額 2500 万円)達成のために、各教会・伝道所が豊かに取り組めるように。

◎ 8 月 21 日(木)、全国壮年会連合定期総会(文書総会)で次期全国壮年会役員(会長、副会長、監査 2 名)と奨学金委員長の選任のために。

<お願い>

○それぞれのところで主にあつて頑張っておられる方々やその働きをご紹介ください。このエマオ通信でその証を紹介してまいります。

○第 1 回壮年大会(1965 年目白ヶ丘教会他)開催以来の大会資料をお持ちの方をご紹介くださいますように。